第6巻第3号
通巻第63号

バッグ弾テロ？

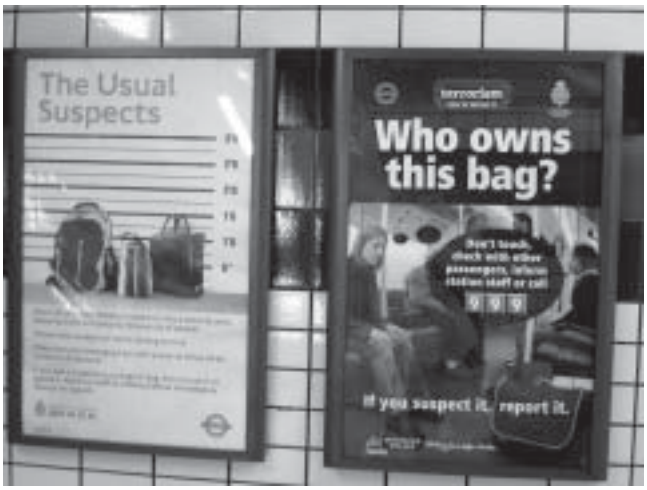
ブレア：おっ、見かけねえカバンもってやがんな。（Usual Suspect）

Who owns this bag?
ドイツんだい？

与太　：オランダい！

ブレア：この前のカバンどうした？

与太　：スペインで爆発（バッグ）しちゃったい。



ロンドン地下鉄の警告ポスター（撮影＝特派員Ｋ）

発行所　東京都杉並区成田東４丁目３番４４号　〒166-0015©からす新聞本社
からす新聞ホームページ　http://www.go-karasu.com/　投書・お問い合わせのＥ-mail　：　colors@go-karasu.com

国という看板のついたモノがたくさんある。国歌や国旗に始まり、国鳥、国花などなどなど。それらは日本国民である私にとって、極々（ごくごく）身近で当たり前の存在のようでいて、何となく煙（けむ）たいばかりのようでもあり。そして、多くの場合、日常で思い出すことは滅（めっ）多になく。

数年前、国技について調べる機会があった。相撲や柔道といったものを蒔絵（まきえ）萬年筆（まんねんひつ）のデザインとして採用しようという、遊びのような仕事のような話。肩肘（かたひじ）張る必要がある類（たぐ）いのものではなかった。相撲、柔道、空手、剣道、合気道の五種を四本の萬年筆とそれを入れる箱に振り分けたセットにしようという、なかなかに豪華な展開。個々の図案は信頼の置ける作家の面々に任せるとして、私は解説を書くのを手伝うことになった。アイディアを交換しているうちに、ちょっと待てよ、という事態になる。私は国技を相撲だと考えていたのだが、国技といえば柔道に決まっているではないか、という人が現れ、空手だって国技なんじゃないですかね、などと言い出す者もあり。なるほど、なるほど。相談しても纏（まと）まるどころか、混乱が弥増（いや）すばかり。完成すれば世界に向けて紹介することになるわけで、いい加減にやっつけるわけにはいかない。お上（かみ）に問い合わせてみることにする。なかなか捗々（はかばか）しい回答を得られず、いくつかの省庁に順次電話をかけてゆく。ああだこうだとやりあっているうちにわかったことは、日本にはオフィシャルな国技など存在しない、という単純な事実。些（いささ）か拍子抜けするような話である。かの国技館という名称にしたって特別なものではなく、無理矢理たとえるなら、私立であるのに日本大学、国立であるのに東京大学という類いとでも言おうか。兎（と）にも角（かく）にも、国技と冠するのに、誰かにことわる必要はないようなのである。じゃあ、女子プロレスを国技だと海外に喧伝してもかまいませんかね、と問うと、法的には問題がなさそうですけれど社会通念上如何（いか）がなものでしょうかねえ、などという、いかにもお役所的なのらりくらりした返答。まあ、私にしても、洒落（しゃれ）でばか話を振ってみているに過ぎないわけで、本当に女子プロレス国技化運動をおこそうなどと考えているわけではない。そもそもこの国では国歌や国旗でさえ曖昧（あいまい）な存在なのだ。曖昧な役人相手の曖昧な話題を曖昧なまま打ち切った。

（最終面に続く）

今日の紙面から

二面（ロンドンレポート）
お隣さん
三面（からすライブラリー）
本　『コンセント』
ＣＤ　『よい』
映画　『ブルー・ベルベット』
四面（建築面）
砂漠に緑を植えよう
五面（語面）
ありえるかいなか

からす新聞は××××が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。
誰でも自由に参加できます（無茶じゃない範囲で）。

ろんどん　つうしん
LondonReport

お隣さん

よほどの山奥などに住まないかぎり、アパートに住んでいようが、一軒家に住んでいようが、必ずお隣さんという人間関係が生まれる。その関係は、時と場合によってまちまちだとはいえ、大抵の場合限りなく近い場所にいる他人といった風味が濃いのではないだろうか？ 知り合いではあるものの、お隣さん以上の関係が生まれにくいことから、なるべく波風を起こさないように、といった付き合いが主になり余り面白みのある物ではない。それでも、人間関係と言った意味では面白みに欠けるものの、人間観察という視点に変わると大分話が変わってくる。全ては知らない、でも所々知っている。そんな事がスパイスなのだろうか。何となく近所のオバチャン達の噂好きも分るような気がしてくる。今僕が住んでいる所は、ベットシットと呼ばれる物件で部屋に小さなキッチンが付いていると言ったもの。地下へは別の入り口から入るので省くと、一階から三階まで七部屋あり、トイレとバスルームがそれぞれ一つずつ一階と三階にある。リビングルームのようなみんなで同時にシェアするといった空間は無いので、同じ屋根の下に住みながらも、余り他の住人と顔を合わせる機会が無い。何となく寂しいような気もするのだが、それでも、しばらく暮らしているとぼんやりとお隣さん達についての概要は分ってくるので面白い。分らないところは勝手に想像するので余計に興味深いのだ。

まず始めに、最初に部屋を見に来た時に会った事のある、一階に住んでいる二十代後半の黒人の兄ちゃん。なかなか爽やかで、いつも元気が良く感じがいい。大家さんとの接し方などから想像すると、結構長くこのアパートに住んでいる感じだ。彼女と同棲しているのか、それとも彼女がよく泊まりに来ているのかは分らないが、彼女もたまに見かける。料理は結構得意なようで、彼が料理している時は大抵いい臭いが廊下に漂っている。おそらくイギリス人ではなく、かと言ってアフリカ系でもなさそうなので、どんな料理を作っているのか凄く気になってしまう。もしかしたら、フランス人なのかもしれない。そんな彼も怒らせると結構怖く、家中に響く声で大げんかをしているのを二、三度聞いたことがある。喧嘩していたのは彼女だろうか？ 本当に大きな声で怒鳴っていた。喧嘩の最後はいつも「出て行けぇ！」「出て行っちまえ!!」で締めくくられる。一階にあるもう一つの部屋に住む白人カップルは、僕のすぐ後に入ってき、四ヶ月ぐらいで出て行ってしまったのでよくわからない。今は誰が住んでいるのかも定かではない状態。二階に上がると、僕の部屋とその向かいに住む三十代後半ぐらいのインド人系の男が居る。結構物静かな人で、僕と並んで一番夜遅くまで起きている。料理は殆どしないみたいで、家に帰って来るのも遅い時が多い。普段は大人しい感じの人なのだが、酔っぱらって帰ってきた時には、いつも思いっきり玄関のドアを閉め、ドタバタと彼方此方の壁にぶつかりながら騒々しく帰って来る。そして、いったん自分の部屋に入った後に必ず、もう一度出て来て三階のトイレに行き、転げるようにして階段を降りて来る、と言った決まりがある。

一番気になっていたのは、僕の真上の部屋の住人。ドタバタと家中の誰よりも騒々しく階段を上り下りし、玄関のドアに張り紙があるのにも関わらず、バタンと大きな音を立ててドアを閉める誰か。当然、部屋を歩くときもドタバタドタバタと、うるさいのである。朝は結構早く六時から七時ぐらいの間だに行動を開始する。始めは態度の悪い若者が住んでいるのかと思っていたが、間違いだった。五十～六十代ぐらいの少し太った白人おじさん。初めて階段で会った瞬間にピンと来た。何となく少し対人恐怖症のような感じで、こちらが挨拶をしてもしどろもどろな様子。ドタバタと歩く理由は、単純にそっと歩くことが出来無いからだと納得した。多分ここに長く住んでいるのだろうこの人、相当の変わり者なのである。一日に何度か、それも不定期で窓から水を捨てるのである。部屋にシンクがあるのでそこに捨てればいいものを、わざわざ窓を開けて外に捨てるのである。運悪く僕も窓を開けていたりすると、水しぶきが入って来て余り嬉しくはない。他には水漏れがある。僕の部屋はしばしば天井から水漏れがあり、明らかに上の階に問題がある訳なのだが、水の漏る場所がシンクの上で問題にならない所なので何ヶ月かは放っておいた。雨が降ったときに漏ることもあるし、天気がいい時に漏ることもある不思議な水漏れなのだが、その場所が部屋の真ん中辺りに移動してしまったので、仕方がなく上の階の扉を叩いた。ドアを開けたのはやっぱりあの太ったおじさんで、余りドアを開かずに顔だけを出して対応。僕は彼の部屋にも凄く興味があったので、思わず小さなすき間からでも観察してしまう。部屋の作りは一緒なので見える部分はキッチンの丁度横にあるのだが、そこには床から天井近くまで本がひたすら山済みになっていた。これだけで、かなり当たりの予感がしてワクワクしてしまう。僕が「水が漏れるんだけど、どうなってるんでしょう？」尋ねると、どうやら彼の部屋のシンクが水漏れするらしいとの答え。前にも同じ問題はあったらしく、大家が直したとか直さないとか。じゃあ、どうしようも無かったら大家に相談でもしますかと取りあえず用事は終わる。そこで僕が立ち去ろうとすると、彼から唐突に「日本人か?!」と聞かれた。「そうだ」と答えると「三島を知ってるか?!」「プロフェッサー鈴木だ

!」「今、三島に関するプロフェッサー鈴木の本を読んでるんだ！」と矢継ぎ早に興奮して話かけてきた。流石にびっくりして対応に困ってしまい、そそくさとその場は切り上げてしまった。まあ、その後でぴたりと僕の部屋の水漏れは止まったので、彼が何かしてくれたんだろうか？　と言うよりも、彼が何かするのをやめた、と考える方が凄く自然な気がしてしまう。その後も水捨ての儀式は続いている。彼が水を使って何をしているのかは実に謎である。

それにしても流石に日本よりも個性的なお隣さんが多い。それに顔をしかめたり、腹を立てたりする前にまず、興味深いと思ってしまったほうがよっぽど、面白おかしく住めるのである。そんなこの場所からもとうとう引っ越しをすることになった。大家さんは、僕が今まで合った人の中で一番典型的なイギリス人紳士といった風味のお爺さんで、何だか好感が持てる。余り会うことが無いのだが、僕の勉強していることにも興味を持ってくれたりして親切な大家なのだ。Ｓｐｌｅｎｄｉｄ！が口癖の、その大家さんにその旨を伝え、四月分の家賃を現金で払ったりしたその翌日の朝に、玄関の手紙置き場に僕は自分宛の封筒を見つけた。「何だろう？」と不思議に思い封筒を開けてみると、なんと小説が一冊。大家と同じ名前が作者の欄には記してある。ページをめくってみると僕宛に作者よりとの事が書いてあった。思い掛けないプレゼントに思わず一瞬ボーとしてしまった。こんなに嬉しい物をもらえる事はそうそうない。逆に言えば、凄く嬉しいだけに読みたくない様な気までしてしまう。面白いか、面白くないかは知る必要がないのだ。なんだか僕は、この本に個性的なお隣さん達の思い出がつまっているような気がしてるのである。

（神山朝人）

テロから守ります

あなたの平穏な生活を脅かすテロリストを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。
あなた一人で悩まないでください。

テロリストバスター

相談無料
秘密厳守

対テロ機器販売・
対テロ対策指導も
致します。

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
LosAngeles: CA 90028, USA
voice　　：　+1-310-493-1001
facsimile ：　+1-323-466-5645

Books

コンセント

田口ランディ

ISB 4-344-40180-8

死んでしまったら、人はどこへ行くの？なんて、子供みたいな、単純なことを自問してしまう。だからといって宗教に走ってしまったり、あれこれ研究して答えを出そうというエネルギーも出てこない。それでも、漠然と不安で考えてしまう。田口ランディの「コンセント」は、そんな思いを救ってくれたわけではないが、死を怖がっているだけの思考から少し踏み出させてくれた気がする。

「コンセント」は田口ランディの小説デビュー作で、「アンテナ」「モザイク」とシリーズが続いている。幽霊みたいなものや超常現象といったオカルト世界と同時に、人間の精神世界をテーマとした小説でもある。

田口ランディの他のエッセイ等からすぐにわかることなのだが、実際に彼女の兄が家に引きこもり、自殺していて、その出来事がこの小説を書くモチベーションになったらしい。そのせいもあってか、主人公の心理描写には真に迫るものがある。

主人公の朝倉ユキは、兄が自殺してから、生きている人の死臭を嗅ぎ分けられるようになった。自分は狂ってしまったのか。なぜ兄は引きこもり自殺してしまったのか。自殺現場に残されていたコンセントの切れ端が唯一の手掛かりである。ユキは、その謎を追っていくうちに、他の人間に共感しその魂を救済する能力が自分にあることを知る。

死後の世界があるのかなんて、考えてしまうが、わかるわけがない。いや、どちらかというとないような気もする。いづれにしても死んでしまってもその人の何かは残るはず。だから僕は何を残せるかを考える。子ども、思想、物、何を残せるかはわからないが、生きている人達にどんな形でつながっていけるのかを考える。そのためには、朝倉ユキのように、身内でも他人でも、生きている人でも死んでいった人でも、様々な人達の思いを感じ取って考え行動する努力が大切なのだろうが、何かと言い訳をつけて、そんな感覚が薄くなっているような僕がいる。なんだか怖い。

（t-高椿礎生一）

よい

爆風スランプ

1984年

Sony Records

SRCL 3049

CDs

無性に昔聞いた音楽を聞きたくなる事がある。それも十年前どころではない程古いもの。世代によるが、多感な思春期に聞いていた音楽はいつまでも忘れられないものだろう。そんな一枚がこれ。

爆風というと「Ｒｕｎｎｅｒ」が圧倒的にメジャーだが、その爆風のファーストアルバムが「よい」。不思議な事に歌詞はデタラメな割に音楽自体は古さを感じない。歌詞が婦女子受けする内容なら昨今のビジュアル系の持ち歌でもおかしくないぐらいだ。当然、婦女子受けする歌詞だとしたら自分が高校生の頃聞くはずもないのだが・・・。ソニーレコードはこういった古いＣＤを「ＣＤ選書」として未だに販売している。ソニーレコードのオンラインショップへ行けばお子様の頃を懐かしむ一枚を探せるかもしれない。もちろん、ソニーの所属アーチストのみだろうが。

（小張寅蔵）

http://www.sonymusicshop.jp/（ソニーミュージックショップ）

からす

Films

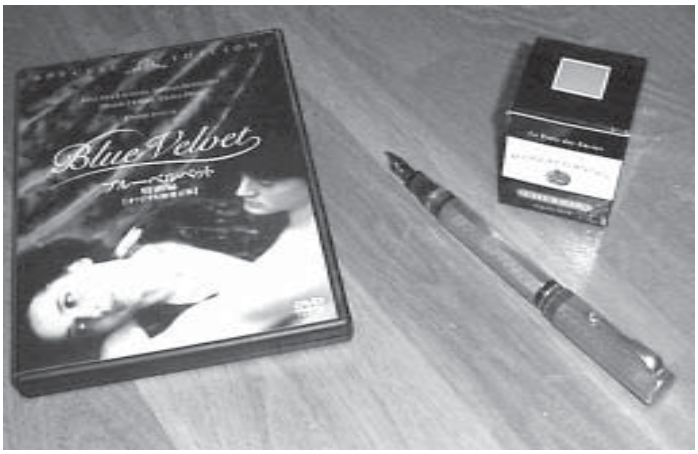
ブルー・ベルベット (Blue Velvet)

1986年公開（アメリカ）

DVD：GXBH17235（20世紀フォックス）

監督：デイヴィッド・リンチ

出演：カイル・マクラクラン、イザベラ・ロッセリーニ、ローラ・ダーン、デニス・ホッパー



私はデヴィッド・リンチを好きなのだろうか。よくわからない。よくわからないのだけれど、ついつい見てしまうのだし、見終わって特別な不満を持った覚えもない。だからといって、最高に満足したわけではない。だから、次の作品に期待を持ったりすることもない。なのに、また見てしまう。なんなんだろうな、これって。そんな繰り返し。

個人的にＤＶＤブームなので、この作品も購入してみた。暫く振りの再会だが、色が褪せていない、ことにちょっとした驚き。というより、色が時代を超えている、というべきか。リンチが作り上げた、人工着色料をたっぷりと塗したような色味は、デジタルな御時世にこそくっきりと映えるものなのかもしれない。

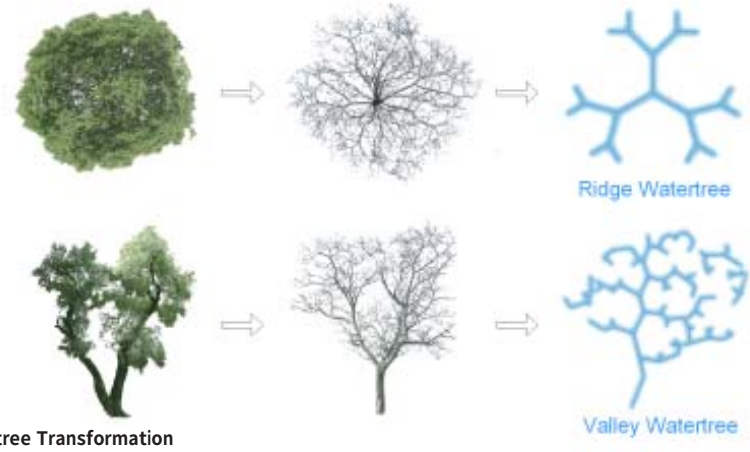
些かグロテスクな、些か歪んだ、物語と登場人物たち。私たちの現実に繋がっているとは感じられないが、それでも、その歪んだ何かが私の心にはね返るのは、やはり、私の中に彼らと響き合う何かがあるからだろう。

美しくもあり、哀しくもあり。艶やかでもあり、気色悪くもあり。リアルには思えないのに、この映像に、世界に、耽溺できてしまう。これではすっかりリンチの思う壺だな。

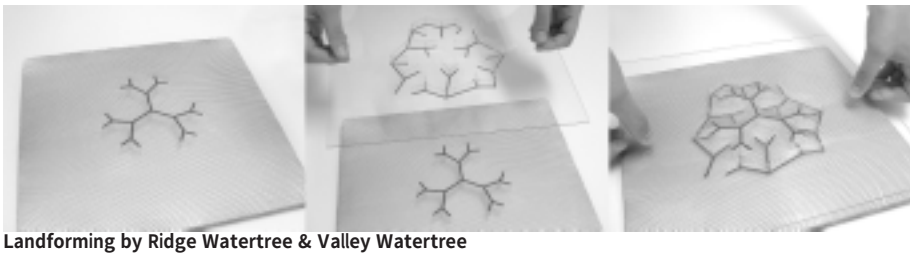
（全太）

Trees of Housing

Trees of Water



Watertree Transformation



Landforming by Ridge Watertree & Valley Watertree

Concept

砂漠に緑を植えよう

ありえるかいなか

イラクに派遣された自衛隊。日本人の犠牲者は出てしまうのだろうか。そこでどちらも日本語にすれば同じになってしまう次の二つの文を比べてみてほしい。

――――――――――――――――――――――――

「もし日本人がイラクで殺されれば、自衛隊は撤退するだろう」

本音（あり得る）：

If a Japanese **is** killed in Iraq, SDF will withdraw from there.

建前（あり得ない）：

If a Japanese **were[was]** killed in Iraq, SDF would withdraw from there.

――――――――――――――――――――――――

下の文は「仮定法」で、事実に反する事柄を扱う。つまり、

if のうしろ：
◎ありえるなら現在形。
◎ありえないなら過去形。さらに他の節の助動詞も過去形。
※過去の事実に反して「もし～だったら」と言うなら過去完了形を使うが、今回は扱わない。

日本語は、あり得てもあり得なくても「もし～なら」の言い方に文法的な使い分けはないが、英語では、仮定法が使われているか否かによって話し手の考えが読み取れる。たとえば・・・

東京のとある駅のゴミ箱の前に立って、「この中に爆弾が仕掛けられてたら」と言うとき・・・

いまどき十分あり得るからなあ：

If a bomb **is** set ...

そんなんあるわけないじゃん：

If a bomb **were[was]** set ...

給食にイルカだって出た静岡県出身：

If you **eat** whale meat, you will like it.

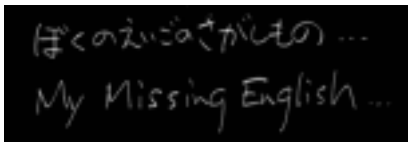
「鯨を食べたら、好きになると思うよ」

グリーンピース・サリー：

No way!!! If I **were to eat** whale, I would die!

「あり得ない！！！　もし鯨を食べなきゃいけないことにでもなったら、死ぬわ！」

※ were to ～ は、未来のあり得ないことを言うときに良く使われる言い回し。



学校英語にわすれものありませんか？

年金とかやばいしそれもひとつの選択肢じゃん：

If the consumption tax **is raised** to 20%, I will leave this country.

「もし消費税が20%に上がったら、ぼくはこの国を出る」

日本共産党は国防費を無くします：

If the consumption tax **should be raised** to 20%, our life would be ruined

「もし消費税が20%に上がったら、われわれの生活は破綻します」

※絶対ありえないとは言えないけど、可能性は少ないと思うときには should を使うこともある。

奴等ならやりかねない：

If America **attacks** North Korea, Japan will not be safe.

「もしアメリカが北朝鮮を攻撃したら、日本は安全ではないだろう」

それほどバカじゃないだろうけど、でも・・・：

If America **attacked** North Korea, Japan would not be safe.

「もしアメリカが北朝鮮を攻撃したら、日本は安全ではないだろう」

サッカーとかよくわかんないけどあなたのこと嫌いじゃないわよ：

If Japan **wins** the World Cup, I will marry you.

「もし日本がワールドカップで優勝したら、あなたと結婚するわ」

ブータンが優勝したって誰があんたとなんか：

If Japan **were to win** the World Cup, I would marry you.

「もし日本がワールドカップで優勝するようなことがあったら、あなたと結婚してあげるわ」

ちなみに2002年ワールドカップにおいて、初戦のベルギー戦を前にトルシエ監督は英語でこうコメントしている。

“ If we **lose**, people will look at the result along with that of Saudi Arabia game and say, "that's Asian football. ”

（最終面に続く）

（一面から続く）

日本という国は周囲を海で囲まれている。そのおかげで、道を挟んで隣国に触れるという機会はない。多少の方言の差異はあるにせよ、日本語という固有の言語で思考しコミュニケイトする、ほぼ単一の民族で構成されている。つまり、日常においては異文化や異国の人々との接触がかなり少ない生活を過ごしていて、自らの日本人というアイデンティティを意識する必要性に迫られることが滅多にない国民なのである。インターネットの普及につれて海外とのやり取りが増えてきてはいるものの、日本人同士での情報交換に留まっている割合が非常に高いし、外国の人や文化との触れ合いも、ネット上では寧ろコスモポリタニズムを助長するような傾向が強く、日本人の日本人性を強く意識させる方向ではないように思える。そんな私が日本人であるということを感ぜざるを得ないのは、例えば、日本代表サッカー・チームの情けない試合、全く納得のゆかぬ自衛隊のイラク派遣、豊田真奈美のメキシコ遠征、沖縄での米兵の乱暴狼藉、『ティファニーで朝食を』のユニオシ氏の姿、などなどなどなどに、ブラウン管や活字を通して触れる時ぐらいのものだろうか。当たり前の日常の中ではおれって日本人だよなあ、と意識する機会は滅多にないのだ。しかし、その意識することのなさ加減が日本人であることの証なのだ、と。そんな風に言えそうな気もするけれど。

日本では、古から、余計な装飾なしに「花」と言えばそれは桜をさすものであったのだし、日本の国花は桜であると考えている人は多い。しかし、これとても公式に決まったものではないようだ。菊こそが国花だと主張する人もいる。なるほど、言われてみれば、それもそうだなという気がしなくもない。

孰れにせよ、私たちは今年も桜の木の下で花見と称しながら、それほどきちんとは花を眺めることもなく酒を飲む。咲く花の美しさ、散る花の儚さに酔うよりも、寧ろ、アルコールに酔うばかり。咲く桜が国花であろうとなかろうと、呑む酒が日本酒であろうと洋酒であろうと、桜の木の下にはとんちきな泥酔者続出。善くも悪くもこれが日本の春のひとつの姿であることだけは確実である。だがしかし、このばかげた風習の渦中にあるときこそが、私にとっては、最も日本人らしく生きていると感じられる瞬間かもしれない。そんな気のする春の夕暮れ。

平和ぼけも甚だしい。

（全太）

（七面から続く）

「もしわれわれが負ければ、人々はその結果をサウジの大敗（ドイツに0-8）に絡めてみて『アジアのサッカーなんてそんなもんさ』というだろう」

大方の見方に同じく敗戦も十分あり得ると考えての“lose”だったのだろうが、結果は引き分けだった。

そして現在、なかなか結果の出せないジーコ監督が近頃こんなコメントを出していた。英訳すれば以下のようになる。

“ If you **don't** need me, I will leave this team. ”

「あなた方が私を必要としないなら、私はこのチームを去る」

あいにくポルトガル語がわからないので100%の自信はないが、解任も甘んじて受け入れるとする客観的な言葉と解するのが妥当だろう。仮に「絶対私が必要だってみなさん、思っているはず」ということなら、こう訳すべきだろうけれど。

“ If you **didn't** need me, I would leave this team. ”

（望月）

bar&kitchen **kanna**

「自分の行きたいお店が欲しい」
呑むの好き。人と話すの好き。
酒好きの仲間とともに自分のりそうの飲み屋を作りました。
飲み食いだけでなく、自作の美術品等の展示や、
ミニライブ、ろうどく劇等にもお使いいただけます。

編集後記

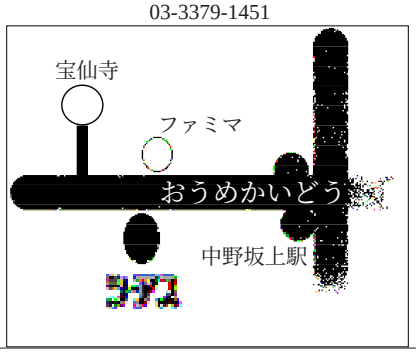
からす新聞第六巻第三号（通巻第六三号）、無事、発刊できました。

新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。

御意見・御要望をぜひぜひお寄せ下さい。

次号発刊予定日は二〇〇四年四月二五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice：　+81-3-3220-0644
Facsimile ：　+81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

1クラス4人までの少人数制学習塾
ターアス
中野区本町2-50-12　ドエル中野201号
03-3379-1451